

二〇二五年一〇月一八日

遠路きて御朱印受くる秋の宮
吾妹子と灯火親しむ茶の間かな
藍染の暖簾くぐりて新走り
小鳥きて狹庭に会議してをりぬ
懸崖の茶室眼下に溪紅葉
朴落葉して寺庭を席卷す
終ひ湯の間遠にひびく火花かな
不揃ひのバケツに千草無人店

二〇二五年一〇月一七日

竈神烟らして焼く秋刀魚かな
飛行雲ぐんぐん昇る天高し
紅白の萩籬とす旧家かな
朝霧を裂いて一声牛の声

二〇二五年一〇月一六日

街路樹を傘とし宿る時雨かな
釣り人の竿先暮るる秋の波止
霧時雨プラタナスの葉重たさう
海風が揺らす千草や須磨の句碑
廃屋を荘厳したる蔦紅葉

二〇二五年一〇月一五日

居待月今宵最後の飛行灯
陽光を弾きて飛蝗跳びにけり
電車いま須磨の松浜窓さやか
秋晴の海に一引く水脈ま白
欄に秋の声聞く一の谷

こすもす

せいじ

千鶴

やよい

康子

よし女

もとこ

康子

うつぎ

きよえ

澄子

愛正

せいじ

むべ

むべ

なつき

澄子

よし女

明日香

うつぎ

むべ

なつき

二〇二五年一〇月一四日

引く波に白砂耀ふ秋の浜

むべ

二〇二五年一〇月一三日

須磨そぞろ白砂の浜の秋を聴く

せいじ

二〇二五年一〇月一二日

遠峰よりグラデーションや秋夕焼
秋晴れて白砂の浜を眩しめり
田じまいの烟棚引く里山路

董雨
澄子
よし女

毎日句会みのる選・二〇二五年一〇月二三日